大学におけるアカデミックスキルに関する短時間・自主参加型講座の実施と展望
Short and Open Courses on Academic Skills at Universities: Practices and Prospects

上島洋一郎（関西大学教育推進部教育開発支援センター）
大西洋（関西大学教育推進部教育開発支援センター）
張暁紅（関西大学教育推進部）
岩﨑千晶（関西大学教育推進部）
Yoichiro Ueshima (Kansai University, Division for Promotion of Educational Development, Center for Teaching and Learning)
Hiroshi Ohnishi (Kansai University, Division for Promotion of Educational Development, Center for Teaching and Learning)
Xiaohong Zhang (Kansai University, Division for Promotion of Educational Development)
Chiaki Iwasaki (Kansai University, Division for Promotion of Educational Development)

要旨

本研究は日本の大学におけるアカデミックスキル講座および関西大学アカデミックスキル講座（2022 年～2023 年度実施分）を取りあげ、正課外での短時間・自由参加型講座の利用状況とニーズを分析した。分析の結果、春学期の基礎的スキルに関する講座では 1 年生の参加が増える傾向にあるが学び直しのために上位年次生の参加もみられること、秋学期の専門的スキルに関する講座では上位年次生の参加が増える傾向にあることが明らかとなった。また、短時間実施であっても学んだ知識やスキルの理解に対して自己評価が高いのに対し、ワークによる課題達成に対する自己評価が低いことも明らかとなった。今後は講座内アンケート調査の拡充及び個別学習支援等における学生の習熟度やアンケート調査を講座運営に利用すること、初年次教育に相応した講座においても上位年次生を配慮して運営すること、短時間・自由参加型にあわせたワークを開発することが求められる。

キーワード　初年次教育、アカデミックライティング、アクティブラーニング、ライティングセンター ／ First-year Experience, Academic Writing, Active Learning, Writing Center

1.　はじめ

初年次教育を導入している大学は 2021 年時点で全体の 98%を占めている。具体的な学習内容についてみると、「レポート・論文の書き方等の文章作法」(91%)、「プレゼンテーション等の口頭発表の技法」（86%）「大学内の教育資源（図書館等）の活用方法」（83%）というように初年次教育においてアカデミックスキルに関する学習の機会が多く取り上げられている（文部科学省、2021）。また、初年次教育としてアカデミックスキルを扱う正課を有する大学が 9 割にまで拡充しており（関田、2018）、授業形態や指導項目等の詳細な調査も進んでいる（時任他、2022）。

その一方で、正課外でのアカデミックスキルに関する初年次教育だけでなく上位年次生をも対象とした正課外のアカデミックスキル関連の講座は様々な大学で実施されている。例えば、図書館内ラーニング・コモンズでは授業とは別にライティングセンターの教職員による講義や演習を実施することも考えられる（文部科学省、2010）。それ

らは教員、図書館、ライティングセンターといった実施母体、対象学生、目的、場所、時期、時間帯、時間、テーマに関して非常に多様な組み合わせの下で実施されている。図書館が実施母体の場合、図書館スタッフによる講座は、教員が行う講座とは異なり、大学の他の教育活動と図書館の活動を近づけ、大学図書館のより効果的な利用に繋がることが期待されている（久保山、2012）。

2.　本研究の問題意識と目的

実施母体、対象学生、目的、場所、時期、時間帯、時間、テーマ等の組み合わせによって多様にデザインされたアカデミックスキル講座の事例報告が諸大学で行われているが、効果検証に関する研究知見は十分に蓄積されていない。そこで、本研究は、これまでに行われた諸大学でのアカデミックスキル講座および関西大学アカデミックスキル講座（2022年度～2023年度実施分）を取りあげ、正課外での短時間・自由参加型アカデミックスキル講座の問題と今後の展望について考察する。本研究を通して大学における正課外でのアカデミックスキル教育の拡充に向けた具体的な手がかりを示したい。

3.　諸大学におけるアカデミックスキル講座の分析と考察

3.1.　諸大学におけるアカデミックスキル講座の実施状況

諸大学におけるアカデミックスキル講座をいくつか確認してみるとその在り方の多様性と共通点が見えてくる。

3.1.1.　図書館によるアカデミックスキル講座

大阪大学附属図書館は全学部１年生を対象として「としょかん春のスタディ・スキルセミナー」（春学期、60分または90分）と題した基礎的なレポートライティングのアカデミックスキル講座を実施している。また人文社会科学系の学部４年生・大学院生向けの講座として「学部４回生・大学院生のためのフルテキスト入手法」（春･秋学期）を開催している。

富山大学附属図書館は１・２年生を対象として「困ったときのレポート作成講座」（春学期、30分程度）を開講し、講座内容は後日動画で学内公開している。さらにオンデマンド動画によるアカデミックスキル講座として、信州大学附属図書館は１年生を主な対象とした「レポートの書き方講座」、名古屋大学附属図書館では、４回生を対象とした「卒論講座」を実施している。

3.1.2.　ライティングセンターによるアカデミックスキル講座

青山学院大学アカデミックライティングセンターは「アカデミックライティングセミナー」として動画資料を公開している。テーマは基礎的なレポートライティング、英語アカデミックライティング、実験ノートの作成などである。

大阪公立大学ラーニングセンターでは2023年度より対面・オンライン併用型講座を２種類開催している。「レポート書き方レッスン」（図書館およびオンライン開催、90分、後日学内オンデマンド公開）では「文献の探し方」「論述の仕方」などについて秋学期後半に開催している。その一方で、「ちょこレポ（ちょこっと！レポートワンポイントレクチャー）」（図書館開催、30分）を学期中の各月に開催し、「レポートの課題に取り組む手順」「パラグラフ・ライティング」などの基礎的ライティングスキルや「記述統計のまとめ方」などの専門的アカデミックスキルをテーマとして選んでいる。なお、後者のうち昼休憩時間帯実施の講座が複数回存在する。

同志社大学学生支援・教育開発センターは、2023年度に対面・オンライン併用型講座「レポート作成体験イベントーそうだ　レポート、書こう。」（秋学期、普通教室およびラーニング・コモンズ開催、40分）において基礎的ライティングスキルを講座テーマとして取り上げ、昼食休憩時間帯に開催している。

3.2.　諸大学におけるアカデミックスキル講座の実施要因

本研究は国内大学のアカデミックスキル講座の網羅的調査を行うものではないが、以上に挙げた事例や他の事例から講座の時間帯と時間、場所に関するいくつかの特徴を見ることができる。

まず、開催場所に関して、学内の施設が持つ利点を生かすべく図書館内のラーニング・コモンズ施設等が選ばれている。その理由として、図書館には幅広い属性の学生が一度に集まりやすい利点があること（末田他、2014）、講座中に文献を探しにいくなど、図書館機能を身近なものとして利用することで施設のもつオープンな雰囲気がワークグループ間の交流の促進に繋がることが指摘されている（渡邊、2014）。

その一方、講座開催が可能な施設をライティングセンターが所管する場合、講座以外でのセンター利用学生の増加を見込んでセンター内で講座を開催する場合もある（矢内、2023）。実際に学習支援センターでの講座開催によって自習コーナーやグループ学習室なども含めたセンター利用者が増加したこと、そしてその理由の一つとして学習支援センターの位置する教室棟に普通教室や情報処理室が併設されていることで学生の出入りが多いことが報告されている（橋本、2015）。

開催時間に関しては、授業１コマ分に相当する時間で講座を行う大学がある一方、30 分程度の短時間講座を行う大学もある。特に後者については、その開講時間帯を授業コマ間の昼食休憩時帯に入れ込む場合がある。授業時間帯に開催する場合に、その講座が特定の学部や学年を対象としているのであればそれら学生を対象とした必修授業のない授業コマを選んで設定するなどの工夫の必要がある。しかし、昼食休憩時間帯の開催であれば特定の学部や学年、学生一般それぞれに向けた講座を自由に開講できるという利点がある。

その一方で、オンデマンド型講座は受講するための時間・空間の制約が対面型より少ない分、学生の利便性は大きい。さらに、卒業論文制作に関する講座を３年次以下の学生が前もって学ぶことや正課で以前に学んだ内容の復習として繰り返し利用できるなど、学生が周りの他の学生を気にせず自由に学べるという利点もある。

4.　関西大学におけるアカデミックスキル講座の分析と考察

4.1.　関西大学ワンポイント講座の場所と時間

関西大学ではライティングセンターが実施母体となり短時間自主参加型講座として「アカデミックスキル ワンポイント講座」を千里山キャンパスの複数施設で実施してきた。2023 年度は表１に示す３つのコースを開講した。

表１　関西大学のアカデミックスキル講座の概要

コース	開講場所・実施回数
アカデミックスキルコース	第 1 学舎（法学部、文学部、政策創造学部、外国語学部）または第２学舎（経済学部、商学部） 春・秋学期各 10 回開講
実験・調査コース	第 4 学舎（システム理工学部、環境都市工学部、化学生命工学部） 春学期３回開講
研究発表ワンポイント講座（上級）	尚文館（大学院） 秋学期３回開講

正課外の自由参加型講座であるため、開催場所と時間は各種テーマに対する学生のアクセスのしやすさを配慮した。このため、各コースを対象となる学生が参加しやすい普通教室で実施し、開催時間についても昼食休憩時間帯での短時間（30 分）としている。実際、講座の認知経路に関するアンケートに対する回答項目の中で「歩いていたらたまたま開催中だった」を選んだ学生は、2022 年春（10.3%）、2022 年秋（10.3%）、2023 年春（5.1%）、2023 年秋（17.4%）であったことから、講座の開催場所（普通教室）と時間（昼食休憩時間帯）が学生の講座参加の誘因の一つであることが確認できる。

さらに、アカデミックスキルコースおよび実

験・調査コースについては当日の講座を動画撮影し、学内 LMS 内にオンデマンド学習用に公開している。これは当日の講座に参加した学生の復習用資料や不参加の学生の自主勉強用資料として利用されている。

4.2.　開講時期と取り扱うテーマ

本講座では学期ごとに対象学生を絞り、それぞれにあわせたテーマを選んだ。2023 年度に開催した各コースの題名を表 2〜5 に挙げる。

表２　新入生を主な対象とした
アカデミックスキルコース（春学期）

①ノートテイキング	⑥レポートのテーマを決めよう
②文献の要約のコツ	⑦レポートに書く内容と構成
③文献の読み解き方	⑧レポートの文章表現
④文献の探し方	⑨プレゼンテーション
⑤引用の仕方	⑩スライド資料

表３　理工系学部学生を主な対象とした
実験調査コース（春学期）

①実験・調査ノートの書き方
②実験・調査ノートの内容
③実験・調査ノートの文章表現

表４　学生一般を主な対象とした
アカデミックスキルコース（秋学期）

①これからのセルフデザインを考えよう	⑥クリティカルライティング
②研究計画の立て方	⑦生成 AI を用いた文章改善
③志望理由書の書き方	⑧インタビュー調査
④先行研究の整理法	⑨アンケート調査
⑤学術論文の構成と読み解き方	⑩文献の量的分析

表５　大学院生を主な対象とした
研究発表ワンポイント講座（上級編）（秋学期）

①文献の探し方と整理
②学会発表・質疑応答
③論文誌投稿にチャレンジする

こうした講座設定にあわせて参加者の傾向も春学期と秋学期で変化する（表 6）。春学期は参加者が多く集まる傾向にあり、秋学期の参加者は減少する。また、参加者の学年別内訳をみると、基礎的アカデミックスキルをテーマとした春学期の講座に１年生が集中し、専門的アカデミックスキルをテーマとした秋学期の講座には１年生の参加は減少する傾向にある。2 年生以上の学生については、基礎的アカデミックスキルをテーマとした春学期の講座にも参加者がみられ、秋学期の講座では参加する割合が増加する傾向にある。

表６　参加者の総数と学年別内訳

	2022 春	2022 秋	2023 春	2023 秋
１年生	159 (77.6%)	5 (12.2%)	122 (87.1%)	1 (3.8%)
2 年生以上	46 (22.4%)	36 (87.8%)	18 (12.9%)	23 (96.2%)
総数	205	41	140	26

また、春学期に継続的に１年生が参加する一方、秋学期では卒業論文作成のために「インタビュー調査」や３年次ゼミ選択での「志望理由書の書き方」に関する講座のように学生自身の研究テーマや学習状況に関連ある講座にのみ参加する場合もみられた。

4.3.　学習のニーズ把握と講座デザイン

講座テーマの選定には学生のニーズを把握することが必要である。そこで、ライティングセンターが実施している個別学習支援における対応記録や大学内での各種行事の把握、各アカデミックスキル講座内実施のアンケート結果をもとにして各学年及び学習時期での学生のニーズの詳細な把握とそれに合わせた講座実施を進めている。

個別学習支援における対応内容記録から講座のニーズを判断する材料を得ることができる。個別学習支援では春学期にレポート作成に関する相談を求める１年生が多い（多田他、2018）。また、

秋学期には 10 月頃に 3 年生以降のゼミへの志望理由書作成に関する相談を求める 2 年生が集中する。そこで、講座のテーマとして春学期には基礎的なアカデミックスキルに重点を置き、秋学期には志望理由書を学生が作成し始める 10 月初めに志望理由書作成のための講座を開講している。さらに大学院生を対象とした講座では 12 月頃に開催される院生合同学術研究大会での研究発表および一般学会での研究発表に関する講座を 11 月に開講している。

アカデミックスキル講座内で実施しているアンケート調査からも講座のニーズを判断する材料を得ている。春学期においては初年次生を想定したテーマを選んだことから実際の参加者として 1 年生が集中することは開講以前から予想されたことであったが、例えば「改めて初心に戻ろうと思ってこの講座を受講しました。1 回生のうちに受けておけば良かったと思うほど大変参考になりました」（講座「ノートテイキング」に参加した 3 年生）、「3 回生で改めて基本的な要約について知ることができて有意義だった」（講座「文献要約のコツ」に参加した 3 年生）といった回答は、正課での初年次教育において当該内容についての学習機会をすでに得ていた可能性がある学生のニーズを示唆している。

さらに、アンケート調査は講座の実施方法やアンケート項目の改善にも役立つ。2022 年春学期での満足度調査（質問「本日、参加していかがでしたか？」に対して選択肢「とても満足」「満足」「普通」「やや不満」を選択）において「とても満足」または「満足」を選んだ回答が 90%を超えた。その一方、当該学期の講座において取り入れたペアワークについて、「ペアになって調べ、比較するのが大変わかりやすかった」「ワーク時間がもっと欲しかった」という意見が寄せられた。そこで、2022 年秋学期はペアワークを各講座でこれまで以上に拡充し、アンケート項目についても「今回の講座で扱った知識やスキルを理解できましたか」（知識やスキルの理解に関する項目）、「講座で扱った知識やスキルを活用し，ワークで課題を達成できましたか」（ワークによる課題達成に関する項目）を新たに追加することで学生の満足度をより詳しく確認した。表 7 及び 8 にその回答を示す。アンケートの有効回答数は、2022 年秋学期は 47 名、2023 年春学期は 140 名、秋学期は 27 名であった。

表 7　知識やスキルの理解

	2022 秋	2023 春	2023 秋
そう思う	38 (80.9%)	93 (66.4%)	17 (63.0%)
ややそう思う	8 (17.0%)	41 (29.3%)	9 (33.3%)
どちらともいえない	0 (0.0%)	3 (2.1%)	0 (0.0%)
あまりそう思わない	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
そう思わない	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
無回答	1 (2.1%)	3 (2.1%)	1 (3.7%)
合計	47 (100.0%)	140 (100.0%)	27 (100.0%)

表 8　ワークによる課題達成

	2022 秋	2023 春	2023 秋
そう思う	24 (51.1%)	48 (34.3%)	10 (37.0%)
ややそう思う	14 (29.8%)	55 (39.3%)	10 (37.0%)
どちらともいえない	6 (12.8%)	35 (25.0%)	7 (25.9%)
あまりそう思わない	0 (0.0%)	2 (1.4%)	0 (0.0%)
そう思わない	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
無回答	3 (6.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計	47 (100.0%)	140 (100.0%)	27 (100.0%)

これまでの満足度調査と比較しても各講座内容に関する知識やスキルを理解できたと感じた学生は一定の割合を維持しているにもかかわらず、ワークによる課題達成に満足をあまり感じない学生の存在も明らかとなった。これは講座が短時間実

施であることで個人ワーク及びペアワークの取り組みが正課以上にコンパクトなものにならざるを得ないことに起因すると考えられるが、今後その理由を尋ねるアンケート調査も併行して実施し、ワークを改善する必要がある。

5.　課題と展望

正課外の自由参加型講座の長所として、ノートテイキングやレポートの構成、引用の仕方などの基礎的なアカデミックスキルはもとより、ゼミの志望理由書の作成などの正課では指導されないアカデミックスキル、生成 AI などの時事的なアカデミックスキルを学ぶ機会を学生自身が柔軟に選ぶことができる点が挙げられる。さらに、春学期に基礎的アカデミックスキル講座、秋学期にその他の専門的アカデミックスキル講座を開催するというように時期ごとに講座内容をまとめることで学生の継続的な参加も見込める。

ただし、基礎的なアカデミックスキルに関しては特に多くの 1 年生の継続的な参加がある反面、専門的アカデミックスキルについては、実際にニーズ調査を手掛かりに開講しても参加者が集まりにくい現状もある。専門的アカデミックスキルについてはニーズの調査をさらに改善する必要がある。講座内実施のアンケート調査はもとより、正課や個別学習支援施設での学生対応を通して確認される学生の躓きや学習ニーズをフィードバックすることがアカデミックスキル講座テーマの選定に役立つだろう。

また、正課において初年次教育を受けた学生がアカデミックスキルを学び直す機会を提供できることもアカデミックスキル講座の長所である。ノートテイキングの仕方を学び直したいという３年生の存在は看過できない。このため、アカデミックスキル講座は上位年次生にも参加しやすい環境を整える必要がある。たとえば初年次生学習の内容に相当するアカデミックスキル講座であったとしても、「初年次生を対象とする」といった文言をアカデミックスキル講座の紹介文に入れないこと、講座内でも１年生を想定した説明を避けるなどの工夫が求められるだろう。

短時間講座（30 分）であることも学生が講座参加のしやすさを感じた長所だろう。短時間開講のため各テーマの学習内容はかなり絞らざるを得ないが、講座内容に対してほぼすべての学生が満足と回答している。しかし、実施方法についてはペアワークやグループワークといったアクティブラーニングを取り入れるためにはワーク内容と時間配分に注意する必要がある。さらに、自由参加型の場合ともなれば参加者が毎回変わり学生同士が馴染みにくいためペアワークやグループワークがスムーズに進まない可能性もあるが、アイスブレイクなどを通した学生の関係作りの時間をとることは非常に難しい。このため、ライティングセンターのチューター等がファシリテーターとして参加する等の改善を行う必要があるだろう。ワーク中にチューターが学生一人ひとりに接することは、ワークによる課題達成の自己評価を高めるだけでなく、チューターと学生の距離を縮め、ライティングセンターでのチューターによる個別学習支援を学生がさらに利用することにも繋がると期待される。

参考文献

青山学院大学（2023）『アカデミックライティングセミナーのご案内』(https://www.agulin.aoyama.ac.jp/writingcenter/event/2164/)（2024 年 1 月 14 日）

大阪公立大学（2024）『OMU ラーニングセンター』(https://www.omu.ac.jp/las/tlc/)（2024 年 1 月 14 日）

大阪大学附属図書館（2023）『講習会・ガイダンス』(https://www.library.osaka-u.ac.jp/research/workshop/)（2024 年 1 月 14 日）

関西大学（2023）『ライティングラボ』（https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/）（2024 年 1 月 14 日）

久保山健（2012）「図書館スタッフによる学習支援の実践:『プレゼン入門　話す基本技術』」『大阪大学高等研究』1, 77-83.

末田真樹子・堀一成・久保山健・坂尻彰宏（2014）「職員・教員・TA 協働による学修支援の取組 - 大阪大学附属図書館における『レポートの書き方講座』を中心に」『大阪大学高等教育研究』2, 55-60.

関田一彦（2018）「2015 年度会員調査結果からみた初年次教育の現状と課題」初年次教育学会編『進化する初年次教育』,pp.191-200.世界思想社.

多田泰紘・岩﨑千晶・中澤務（2018）「ライティングセンターに寄せられた個別学習相談の分析：学生のニーズと課題の可視化」『関西大学高等教育研究』9, 37-42.

同志社大学（2023）『ラーニング・コモンズ』(https://ryoshinkan-lc.doshisha.ac.jp/)（2024 年 1 月 14 日）

時任隼平・三井規裕・福山佑樹・西口啓太（2022）「初年次生のアカデミックライティングに関する実態調査」『関西学院大学高等教育研究』12, 31-45.

富山大学附属図書館（2023）『中央図書館』(https://www.lib.u-toyama.ac.jp/lib-chuo/)（2024 年 1 月 20 日）

名古屋附属大学図書館（2023）『アカデミックライティング講習会』(https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/guide/literacy/guidance_cal23.html#thesis2)（2024 年 1 月 20 日）

橋本信子（2015）「学習支援における教職協働 ― 大阪商業大学「『楽習アワー』2011～2014 年度前期の取り組み」『大阪商業大学論集』10 (4), 43-56.

文部科学省（2010）『大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－』(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm)（2024 年 1 月 14 日）

矢内真理子（2023）「2022 年度アカデミックスキルセミナー開催報告」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』14, 49-51.

渡邊淳子（2014）「初年次生に向けた協同学習による論文指導の試み ― 平成 25 年度学際科目『論文作成講座』実施報告」『大学教育年報』17, 45-56.